SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.19

2019.03

みんなを笑顔へ

Take Free

みんなを笑顔へ
― 株式会社林水泳教室　取締役副社長　林正洋 ―

インタビュアー：片山清宏　　文・片山久美

「みんなをえがおへ　みんなで笑顔を」をコンセプトに、茅ヶ崎の地元の人々に愛される「水泳教室」は、1967年創業。今年で52年目となる。

教室のプールで泳ぐ子どもたちの姿に目を細めながらインタビューに答えるのは、林正洋。株式会社林水泳教室の副社長にして株式会社ハヤシの社長である。ガキ大将がそのまま大人になったような、魅力溢れる若き経営者に話を聞いた。

おばあちゃんの水泳教室

林は1978年、3人兄弟の次男として生を受けた。茅ヶ崎生まれ、茅ヶ崎育ち。

「物心がついた頃には、すでに当たり前のように泳いでいましたね。なにせ本家の庭がプールでしたから（笑）」

林家の水泳の歴史は古く、意外にも林の祖母から始まっているという。1960年代、林の父である林正則が水泳選手として活躍したことで、祖母が「地域の子どもたちに水泳を教えたい！」とえぼしクラブを立ち上げたことがきっかけだった。

「おばあちゃんがいろんな学校のプールで子どもたちに水泳を教えはじめたんで、父の兄弟姉妹たちも一緒に教え始めたんだそうです」

海沿いの地域という場所柄、泳げる子に育てたいと思う親が多かったこともあり、えぼしクラブの入会者数はどんどん増えていった。やがて、建設会社を経営している祖父が東海岸の本家の庭にプールを建設。300坪の庭に10m×3レーンの室内プールを作った。このプールが林水泳教室の歴史の始まりであり、林が生まれた当時見ていた原風景なのだ。

会費制でスタートした家の庭の水泳教室。ピーク時ではなんと会員が800人を超え、「庭のプール」では手狭になった。地域の人たちの理解もあり、本村若松町地区の広場の土地に25m×６レーンの室内プールを建設。1976年に林水泳教室は株式会社となり、祖母が社長としてスタートした。林が生まれる2年前のことだった。

破天荒な父、教育熱心な母

「親父は結構やんちゃだったようです（笑）。水泳ひと筋で大学まで進学しましたが、日本大学在学中は学生運動もあり、授業には出ない代わりに祖父の建設会社の手伝いに行っていました。卒業後は、祖母の片腕として若い頃から林水泳教室の経営に関わっていたそうです」

　そんな父と結婚した母は、小中学校の同級生。早稲田大学を卒業後、外資系の会社に就職したのち父と結婚。

「破天荒な父と対照的で、母はしっかり勉強しなさいと教えてくれました。小中学校の頃は家で夜、父の姿を見たことがなくて（笑）。ほぼ母に育てられました(笑)。母は今も林水泳教室の経営を手伝ってくれていますが、僕ら3兄弟は母から人生で大切なことを学びました。水泳だけでなく、人や地域、社会のことなど色々なことに興味を持ち、いま経営者として頑張れているのは父と母のおかげですね」

　林は3人兄弟のまんなか。2歳上に兄、2歳下に弟がいる。3人とも物心ついた頃から水泳をやっていた。林は地元の松浪小学校ではもちろん水泳は一番。小学校2年生から本格的に選手コースに入り、週5、6回練習し大会でもいい成績を残せるようになっていった。

「体はでかくなかったけど、どちらかというと、“いじめられっ子”よりは“いじめっ子”でしたね（笑）。水泳以外にも、野球をやったり。もちろんエースで4番でした」

　林水泳教室の所属選手として順調に成長していった林だったが、そんな生活が突然終わりを告げる。小学5年生に上がる頃、父が林水泳教室を辞め独立したのである。父は「パルバル湘南スポーツクラブ」を１年半後に創業するまで収入ゼロ。自分たち兄弟も水泳をするために鎌倉スイミングまで通ったりと苦しい状況が続いた。

「母が家庭教師をしたり、母方の家族に援助してもらいながら生活していました。高校1年生の夏に祖父から呼ばれて父が林教室に戻るまで、林水泳教室所属ではない時代があったんです」

　しかし、天性の経営感覚を持つ父が創業した「パルバル」は、1990年10月のオープン時には2,800人もの会員が集まり、仲間だった選手も移籍し、強いスイミングチームができた。時を経て、現在はホットヨガ、キッズダンスなども楽しめるフィットネスクラブとなり林水泳教室の子会社として経営している。

兄弟コンプレックス

　水泳の推薦入学として進学した湘南工科大学附属高等学校。体育クラスに所属し、水泳に明け暮れる毎日が続く。1996年、高校3年生のとき団体でインターハイ総合優勝。

「自分は副キャプテンでしたが、キャプテンがジュニア日本代表だったり同級生がアトランタ五輪に出るような選手だったりとメンバーに恵まれました。私は個人メドレー200メートル、400メートルに出ましたが、予選でベストタイムには程遠く、決勝には出られませんでした」

　インターハイで団体としては優秀な成績を修めた後、大学の進路を決める時期が来た。

「当時、兄の正基は法政大学の水泳部だったんです。今思うと、兄や弟にコンプレックスを抱いていた自分がいました。兄は高校でもキャプテンを務め主力メンバーでした。自分はその時1年生でみんなに「正基の弟」として見られていました。だから兄とは違う大学に行こうと、法政大学の推薦（コネですね笑）の話を断って、日体大の体育推薦の試験を受けたんです。先生からも大丈夫と言われていたのですが、予想に反して落ちました。ショックで一時は自暴自棄になり、水泳を辞めて海外留学や自衛隊入隊なども考えました。でも、両親の勧めもあり、結局、秋から赤本を開いて受験勉強を始めました」

そして、林は水泳の実力でチャレンジできる大学を受験し、見事合格！茅ヶ崎を離れ、千葉県勝浦市の国際武道大学で新しいスタートを切った。

新しい自分を求めた大学生活

「大学生活は新しい自分を発見できた楽しい4年間でした。水泳部ではキャプテンもやったし、千葉は波が良かったので、新しい仲間達とサーフィン三昧の日々を過ごしました。音楽も得意だったので、プロを目指そうと後輩と一緒にバンドを組んで、週末に千葉駅で歌ったりもしました。実は、オーディションバラエティ番組「ASAYAN（アサヤン）」にも出場したことがあるんですよ（笑）」

この頃、「仲間を集めて面白いことをしたい」と横浜で2,000人規模のパーティーを企画・運営した経験が、その後、茅ケ崎ヘッドランドビーチで開催した入場無料の野外イベント「えぼしのこころ」につながっている。林が実行委員長をつとめたこのイベントは、ビーチクリーン、ヒップホップなどのライブイベント、地元政治家とのトークセッションなど多彩なプログラムを盛り込んだ大人気イベントとなり、2006-2010まで茅ヶ崎を盛り上げたのである。

将来は実家の水泳教室を継ぐとか、水泳を仕事にするなどの発想は全くなかった大学時代。「就職しなくてもなんとかなるでしょ」と楽観的に考えていた林だったが、両親から林水泳教室への就職を勧められた。悩んだ末、大学卒業後の4月から林水泳教室へ就職。好きなこと、得意なことを思うままにチャレンジして来た気楽な大学生活から、家業であるスポーツクラブのトレーナーという厳しい仕事生活に一変した。

はじまりは、お客様ノート

「最初の1、2ヶ月は辛かったですね。もともとトレーナーなんて目指してないし、何をしていいかわからない。自分はウェイトトレーニングが嫌いだったから正しいトレーニング方法も知らなかったんです。スタッフやお客様から『林の息子だからやってるんでしょ。どうせ何もわかってないんでしょ』と思われているのが、ビシビシ伝わってくることもありました（笑）」

林は、「このままではいけない。まずは自分の体を作ってお客様に信頼してもらわなければ」と、自身の肉体改造を始めた。

「当時、流行し始めたばかりのマンツーマントレーニングをやっていた友達が東京の広尾(トータルワークアウト）にいたので、会員になり週3回くらい通っていました。朝一で広尾に行ってトレーニングして、13時からの遅番に出勤というストイックな生活を続けました)

自己投資が功を奏し、見る見る筋肉が付き１ヶ月で体重が10キロ増加。まわりからは「正洋！体でかくなったな！」と驚かれた。

もともとお客様と話をするのは得意だったという林。体づくりを始め、トレーナーという仕事に前向きに取り組むようになると、どんどんコミュニケーションが取れるようになった。

林は、お客様とやりとりした会話の内容を丁寧にノートに書くようになった。ノートにはトレーニングの内容だけではなく、お客様の趣味や家族の話、夢や目標、困っていることなど、林だからこそ聞けた貴重なメッセージが詰まっていた。

「お客様とコミュニケーションが取れるようになり、相手の要望が分かってくるとそれを実現するために何をすべきかが見えてくるんです。トレーニングの補助メニューを作るための資格を取ったり、カウンセリングや対人スキルを高めるためにソーシャルスタイル理論も学びました。そうしているうちに『トレーナーの仕事って人を幸せにできる！』と思うようになり、プロの歌手になる選択肢はいつの間にか消えていました（笑）」

トレーナーから経営者へ

林が結婚したのは2010年、32歳のときだった。「付き合って半年でプロポーズして1年で結婚しました」

家族を持ち、トレーナーとしての仕事も周囲から高く評価されるようになり、公私ともに順風満帆に見えた。しかし、林は何か違和感を感じていた。

「このままトレーナーで終わっていいのか。新しい仕事に挑戦するのか。一度きりの人生、何か別の世界を見てみたい。本当に自分がやりたいことは何なのか、2年くらい悶々と考え続けていましたね」

当時、林は実行委員長としてビーチイベント「えぼしのこころ」を開催していた。

「やっぱり自分は地元のまちを盛り上げるのが好きだと気付いたんです。地元茅ヶ崎の人のために働いて、地元のまちをもっともっと良くしていきたい。それで、『まちのエンジン』になろうと思いました」

「実は当時、政治家になろうなんてことも考えたんです。でも、林水泳教室で今の仕事をしっかりやっていくことが、自分が一番地域に貢献できるんじゃないか。そう思うようになり、最終的には民間人として"スポーツによる地域活性化"を自分のライフワークにしようと決めました」

人生の軸も固まり、林の中で仕事への情熱が再び湧き上がってきた。2011 年、株式会社林水泳教室の取締役に就任。33歳の若手経営者の誕生である。林は、これまで積み上げてきたトレーナーとしての現場経験を経営に活かそうと心に決め全力疾走を始めた。

「祖母から始まった林水泳教室が3代目である自分たち兄弟に継承されたんです。兄と弟と一緒に経営の舵を切っていく大きな責任を担いました。先代からの伝統を守りつつ、時代に合わせて変えるべきところは変えていく、それが僕らの使命だと感じました」

こころを動かせば、未来が変わる

株式会社林水泳教室（代表取締役　林正基）、株式会社パルバル湘南スポーツクラブ（代表取締役　林正基）、株式会社ハヤシ（代表取締役　林正洋）の3社の総称がハヤシグループである。

創業から52年を迎えたハヤシグループのモットーは、「こころを動かせば、未来が変わる」。地域に笑顔と元気を育むサードプレイスとして、100年先を見据えたスポーツクラブづくりのための活動を進めている。林は、ハヤシグループについてこう語る。

「一人ひとりの健康を、まち全体に活力をもたらす大切な要素と考えているんです」

2020年の東京五輪を間近に控え、国内ではスポーツ機運の高まりや健康志向、メンタルヘルスがますます脚光を浴びているが、その一方で、超高齢社会を迎えるにあたり、個々人の身体能力の低下や生活習慣病等が社会問題としてクローズアップされている。

そんななか、ハヤシグループは、「スポーツを楽しむ」「健康をつくる」「地域を支える」という3つの戦略を柱として様々な事業を展開している。その事業範囲は、水泳・体操・ダンス・野球・介護予防などの教室事業、スタジオ・ジムなどのスポーツクラブ事業のみならず、民間や公共スポーツ施設などの運営受託事業、整骨院などの医療系事業など幅広い。

さらには、ビーチクリーンや畑づくりなどの社会貢献活動なども行い、「ス

ポーツ」や「運動」というカテゴリーにとどまらない多様な事業展開を行っている。

株式会社ハヤシ代表取締役

　そのハヤシグループの中で2013年に設立された株式会社ハヤシの代表取締役が林本人である。大型リゾートプールの安全管理、小学校プールの監視、地域の健康事業も運営している。
「自分が会社の代表で、公共からお金をもらったり、他の民間企業からお金をもらう仕事。今までハヤシグループがやったことのない新しい分野での挑戦です。今まではハヤシの看板に頼ってお客様個人に対してサービスを提供してきましたが、今は経営者として自分の責任で行政や企業相手に交渉して仕事を取ってくるという緊張感。責任は重いけど大きなやりがいを感じています」
　林は見事、事業提案のコンペを勝ち抜き、株式会社プリンスホテルと業務委託契約を締結し、大磯ロングビーチのプールの安全管理事業を一手に引き受けた。茅ケ崎市営水泳プール指定管理業務も受託し、新社長として経営手腕を発揮している。

　林はライフワークとして「海掃～kaiso～」という、子どもたちを中心とした海岸清掃プロジェクトをNPO法人として2008年に立ち上げ、今でも毎週土曜日に欠かさずビーチクリーンを行っている。
「コンセプトは、『海をきれいにすることは、未来をきれいにすること』。いつも泳がせてもらい、遊ばせてもらい、食べ物をもらっている海への感謝の気持ちを込めてゴミを拾っています」
　拾っている時間から拾い終わる時間まで、砂浜のあちこちで生まれるのは、子どもたちの「笑顔」。環境美化や社会貢献などと大上段に構えず、純粋に子どもたちと一緒に楽しんでいる姿がなんとも林らしい。

ハヤシモデルを世界へ

　40歳を越え経営者としても大きく成長した林。これからの展望を聞いてみた。
「父は私たち3兄弟を『地の利、人の利、金の利』に長けた人物に育てたそうです。早くから地元に根をはり地域に貢献してきた兄、会計実務に長け会社の財務を一手に担う弟。そして、私は人と人を繋げ仲間を集めることで会社、地域の役に立っていきたいと活動してきました」
「これからの超高齢社会の時代、日本だけでなく世界中で、ハヤシグループのような地元に寄り添う地域総合型スポーツクラブが必要になってくると思うんです。あと10年がむしゃらに仕事を頑張って、上の子どもが18歳になったら、家族で海外に進出しようかな（笑）。ハヤシモデルを世界へ展開してくことが私の夢なんです」
　林水泳教室には今日もみんなを笑顔にする彼の豪快な笑い声が響いている。

HAYASHI GROUP

https://hayashi-g.com/

みんなをえがおへ　みんなで笑顔を

林水泳教室　林体操教室　ハヤシスポーツクラブ　ハヤシ整骨院　HAYASHI　PAL-BALL SPORTSCLUB　PAL-BALL CLASSIC　884 hot studio

SHONAN VISION vol.19 | 2019年3月号　2019年3月25日発行　発行:NPO法人湘南ビジョン研究所　〒251-0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3-9-29　shonan-vision.org